

学校とは ①登校

学校の意義や私なりの教育観について書くシリーズ不定期掲載しようと思えます。今回は「登校」についてです。若い頃お世話になった校長先生から、「登校」って言葉に疑問感じたことないか尋ねられました。確かに「学校に行く」ことに対して家に帰るときは「下校」と言い、対になっていません。校長先生は続けます。「同じ『登』の字に『登山』とあるけど、山は昔から山で修行をする人や、麓で水の恩恵を受ける農民、海上での位置を山の形で把握していた漁民や船乗りなど、海で生きる人々にも崇高な存在で信仰の対象でもあった。その崇高な場所に行くということから『登山』と呼ぶようになり、後々『立派なところに行く』という意味あいの時も使われるようになり『登城』や『登庁』『登校』という言葉も生まれたんだ。」と教えられました。

確かに「登校」を調べてみると、江戸時代の旧暦2月（今の3月初旬）の初めての午（うま）の日は、学齢期（数え歳7、8歳）に達した子供たちが「寺子屋入り」をする日であったのです。親に伴われて、先生であるお師匠さんに挨拶に行き、寺子屋に入ることを、「初登山（しょとうざん）」と言いました。この伝統が明治の学制に引き継がれ、それ以降、学校の入学式は春の行事になり、学校に行くことを「登校」と言うようになったという説が有力です。昔から、学校は学問を教える場所が崇高で立派な場所であるという考えから、「登校」「下校」という使われ方になったと考えられます。

現代の学校には、子供たちが楽しむことができるような学習活動や様々な行事がありますが、当時は、今とは快適さも比べものにならず、そのような環境に身を置きながら、頭脳、精神そして肉体を鍛える場所であった学校は、山と同じように険しいものであったと想像できます。【核心まで行きつかないので、この続きは近日中!】



読書宝くじ一等決まる!

先週は、図書委員会が企画していた、「読書宝くじ」の抽選日でした。カードにスタンプをためて、宝くじ券をゲットした子供たちが、ロイノートで公開された当選番号を見て、悲喜交々（ひきこもごも）の発表になりました。一等商品（右写真）は、昨年度に引き続き、図書の市野瀬先生が準備され、子供たちから垂涎の的になっていたようです。見事一等を引き当てた5年3組の岩元陽菜さんに、10日（月）の給食の時間に図書委員長のさんから、授与式が行われました。このように委員会の子供たちのアイデアのおかげで、帯西では本を読むことが好きな子供が増えており、感謝しています。



「書き損じはがき」ご寄付へのお礼

1月に全校に、熊本県視覚障がい者福祉協会より依頼がありましたはがきのご寄付をお願いいたしましたところ、92枚のはがきが集まりました。協会へお送りし、視覚障がい者の福祉の向上に関する事業などに役立たせられるそうです。

